

解説編

はじめ

竪穴式住居が日本の建築のはじめであるとするならば 発掘された遺跡から約 9,500 年前の縄文時代前期に遡るらしい。

世界四大文明のはじめが紀元前 3,000 年～2,500 年頃であるから、あくまでも建築に限っての話ではありますが、さように日本の建築の歴史は古いのであります。

例えば後期石器時代や縄文時代に石器の材料とされた黒曜石は特定の場所でしか産出されないもの、伊豆諸島神津島産の黒曜石が南関東の遺跡で発見されているなど、文明のはじまる前に、既に人々の営みがあったと考えれば、建築は当に人々の営みです。

日本では青銅器と鉄器が同時に伝わり、石器時代から青銅器時代を飛び越えていきなり鉄器時代に入ったため、弥生時代には大型建物の施工にノミ状工具など鉄器の道具が用いられた。

もちろん、先進の工具があるからと言って大型建物が建つはずもなく、それを企画し携わる人々を指揮するリーダー「大工」がいたのでしょう。

では、私どもの先達が残した文化的遺産である建築物の数件を改めて検証してみたい。

A-1. 法隆寺五重塔

奈良県生駒郡斑鳩町

平成 5 年（1993 年）ユネスコの世界遺産に登録された。通説によれば、601 年聖徳太子により斑鳩宮いかるがのみや近くに建てられたのが法隆寺であるとされる。私などには馴染み深い昔の紙幣には、聖徳太子の肖像と法隆寺の夢殿が印刷されていた。金堂、五重塔を中心とする西院さいいん伽藍がらんと夢殿を中心とした東院伽藍とういんがらんから構成され、西院伽藍さいいんがらんが現存す

る世界最古の木造建築物群である。中門、金堂、伽藍^{がらん}を囲む土塀も含め、建築物の施工は朝鮮半島の影響が濃いと推察できる。昭和 24 年（1949 年）修理解体中の金堂において火災が発生し、金堂初層内部の柱と漆喰壁^{しっくい}に描かれた壁画を焼損した。

佛教信仰の土地を遠くからでも望まれる崇拜のシンボルとして必要である東大寺の他の堂棟に先駆けて塔は着工された。高塔の建造の経験もある百済の国から、工・匠を招き学んだようである。30m の塔の傾斜には敷地全面を版築突き固め、地盤改良し、礎石、柱座、基壇と新しい石を加工し、整然と配置されたている。その後の塔建築のお手本となり、全国各地で今でも見る事が出来る。

A-2. 東大寺大仏殿

奈良県奈良市雑司町

太平 15 年(743)東大寺建立に大仏造営の^{みことのり}詔は聖武天皇より下され、「西海」(山口県長門郡銅山)ほか全国から集められた銅 74 万斤^{きん}(約 500 t)、鑄造を容易にするため錫を加え実際は青銅製、銅の鑄造に用いた木炭だけで一説によれば約 800 t (1 貫=3.75 kg で換算して約 213,000 貫、現在同様に炭俵 1 俵 4 貫として 53,250 俵に相当する)、金メッキを施すための金 10,436 両(約 375 kg)、鑄造だけでも碑文によれば「三箇年八ヶ度」(実年数 2 年間強) 8 回に分けて鑄造^{ちゅうぞう}を繰り返し高さ 14.98m^{るしゃなぶつぞう}盧舎那仏像が出来上がる。仏像^{おお}を被う容量^{たてや}の建屋が建てられた。初代のお堂は正面 86m、奥行 50.5m あったが、二度による焼失で修復され、現在の建物は正面 19m 程縮められているが、それでも世界最大の木造建築として威容を誇っている。また、現在は消失しているが東大寺には東西二塔が聳えていたとのこと。遺構の調査や古文書から推定される規模は七層 23 丈 70 m (一説に 33 丈約 100m) の高さであったそうです。

法隆寺の五重塔の建立から 100 年余の間に、高さ倍以上の塔を建立できるまでに技術技能が進歩したことに畏敬の念を感じます。

ちなみに、鉄骨造で建造するなら高さ 10 倍のタワーに匹敵する技術水準とのことです。

B-1. 姫路城天守

兵庫県姫路市

2015 年平成の大修理を終えた姫路城は、標高 46m の姫山山頂に、天守閣以下 82 棟におよぶ櫓、門、土塀などがその威容を現在に残している。ほぼ建物・構築物が完全な状態で残っており、近世の城郭全貌を知ることが出来る。五層六階地下一階の大天守閣と東西乾の小天守閣を渡り廊下で繋がれ連立式と称されます。屋根・外壁は左官が漆喰仕上げを施し、その白さから白鷺城と言われる。その縄張りの見事さと建築物の完成度は、城郭建築の代表作であり、それに携わった大工棟梁の名作である。

B-2. 彦根城天守

滋賀県彦根市

関ヶ原の戦いの後、豊臣方への抑えの要として急ぎ築城された。資材の調達には、周辺の旧大津城や旧小谷城、旧安土城などの石垣その他の廃材が利用された「俄か造り」と言われるが、出来上がりは素晴らしく当時の職人集団の技量に感心させられる。

三層三階地下一階の天守閣には唐破風も取り入れ、二階迄花頭窓が多く配列され大工、左官の優れた技巧が施されている。

B-3. 松本城天守

長野県松本市

城全体に堀と土塁がうまく配置され、5か所の虎口（コグチ）が設けてある。土木工事としての優秀さが際立ち、五層六階の天守閣外壁下見板が黒色であることから「鶴城（ウヅヨウ）」と呼ばれる。

B-4. 松江城天守

島根県松江市

宍道湖に臨む姿は風格があって、五層六階大入母屋屋根の上に望楼ぼろうろうを載せ、古い形式の木造化粧造り、桃山時代初期の松本城や犬山城などに見られる黒の下見板張り。当時の大工の技量は、内階段から柱、梁はりの構造を見てその堅固さに驚く、柱には数本の木材を束ね鉄の帯で結束した集成柱を用い重い天守閣を支える工夫をみることができる。

C-1. 日光東照宮陽明門

栃木県日光市

日光東照宮は、江戸幕府初代将軍・徳川家康を神格化した東照とうしょう大権現だいごんげんを祀る。日光の歴史は、鎌倉幕府、関東公方、北条氏の歴代を通じて、東国の宗教的権威となっていた土地である。中でも陽明門は、ことわざに「日光を見ずして結構と言うな」と、言われるぐらい豪華絢爛ごうかけんらんを具現化した建築物である。規模は間口約7m、奥行約4m、軒までの高さが約11mしかないが、その施工には述べ13万人が携わったと言われる。

日光東照宮の建物には、多様な動物の木彫像が多くみられるが、これらの動物のほとんどは単なる装飾ではなく象徴的意味や吉祥的意味合いをもつ。有名な「眠り猫」「三猿」の彫り物にも、いくつか

に解釈される言い伝えがある。今でも近隣の今市町には、改修作業の担い手として技を伝承している集団もあり、各地の祭礼で使う鉾ほこや山車だしに装飾される彫り物も注文を受けていると聞く。

「眠り猫」「三猿」と同じくらい有名な「鳴き龍」（薬師堂天井）は、龍の顔の下で拍子木を打つと音が共鳴して鈴を転がしたように鳴くので「鳴き龍」と言われますが、拍子木を打つ位置を違えると鳴きません。どのような細工を施したのか、それを作った職人の技に感心します。

陽明門に施された彩色は、塗装職人と言うよりは塗師（漆職人）が伝承してきた生彩色工法と言われる手法で、一般に多く用いられる膠彩色工法に比べ何十工程を要すると聞きます。その惜しまない手間が、絢爛豪華な輝きを放っています。

C-2. 大滝神社

福井県越前市

正面から見ると、どっしりした屋根が四層に組みあがり、本殿と拝殿を連結した複合社殿造り。下から唐破風からはふ、千鳥破風ちどり はふと積み重なり、屋根の葺き材は桧皮ひわだの薄板。軒全面に彫刻が施され、雨戸に彫られた花模様にも技を競った跡しのが偲ばれる。大工一職種による建築施工として大いに参考になる。

案内くださった地元の人によれば、今から約 170 年前天保の大飢饉の三、四年後、費用は村の人達の寄進によって建立されたとのこと。作事には永平寺の山門を手掛けた棟梁が携わった。棟梁が書き残した大工の手間賃の見積書には 470 両とあり、1 両を 10 万円と計

算して 4,700 万円と推計される。しかし、当時の大工の手間賃には製材の費用を含むとのこと、棟梁が山に分け入り材木に適した原木を選定し、樵が伐採し丸太にしたものを木挽職が現場まで運搬。その後、大工が柱材や板材に製材するのが当然であった。現在の加工技術と製材機械を用いても、大工の請負金額は数倍にもなるであろう。

現在なら屋根の葺き替えだけでも一億円を優に超える費用を要するそうです。

C-3. 妙喜庵待庵

京都府大山崎町

豊臣秀吉の命による千利休の作。数寄屋^{すきや}建築の原型とされる。

茶室に用いられる柱材は細く、柱の径（寸法）の一割とされるチリ（例えば、四寸の角柱ならチリ寸法は四分、三寸五分の柱ならチリ寸法は三分五厘と決まる）を取るため、土壁厚に制約があるので荒壁仕上げとなり、投げスサ仕上げの藁スサの見える草庵風^{そうあんふう}である。

天井高は低く、屋根裏の垂木には竹材が多く使用されている。

二畳の広さであるが、狭さを感じさせないのは配置された窓と躡り口の寸法が巧みに調和されているからだと推察する。

C-4. 桂離宮

京都市

明治 16 年（1883 年）に桂離宮と称されるようになった。古書院、中書院、新御殿は入り母屋造り。柿板という薄い板を葺き足し竹針で止める柿葺き（コラブギ）で、書院建築の代表作である。古書院は松の角柱、壁は漆喰のパラリ壁で、天然生消灰と消石灰の性質を上手に使い分け、その空間の雰囲気醸し出している。各々の建物に

は種々の木材を使用し、異なった趣^{おもむき}を肌で感じる。大工、左官、屋根葺き工、そして畳職、襖、唐紙、飾り金具等の技の結集を見る事が出来る。

D-1. 日本銀行本店

東京都中央区

明治 29 年（1893 年）竣工 設計：辰野金吾。この建物が日本人建築家の手になる初めての国家的モニュメントだった。辰野金吾氏は、一年をかけて世界の主だった国の国立銀行を見て歩き、設計案をロンドンで書き上げ、イギリス・ベルギーの建築家にチェックしてもらった。外壁は総石積みで重厚感があり、内部は和洋折衷の長所が濃縮されている。

外回りの石積みには、硬い御影石^{みかげいし}を採用。その試作として瀬戸内産の北木石^{きたぎいし}を採用した第一銀行大阪支店の工事では、気の荒い石工達と何度も衝突したが苦勞して仕上がった姿を目にした時、職人達から万歳の歓声があがったと聞く。

D-2. 赤坂離宮

東京都千代田区

現在の赤坂迎賓館^{げいひんかん}。明治 42 年（1909 年）竣工 設計：片山東熊（トクマ） 片山は長州奇兵隊の出身で山形有朋の引き立てで宮内庁への道が開かれた。日本人建築家を養成したジョサイア・コンドルの最初の弟子。

建設に心血を注ぎ、完成の報告を明治天皇に奏上したところ、一言「贅沢すぎる」と仰せられショックを受け、病気がちになったという。結局、皇太子（後の大正天皇）は住まわれなかった。

日本の宮殿建築では抜きんでて立派であり、水洗トイレや空調の

設備を完備し話題をよんだ。

当時の価値で総工費 51 万円、現在の価値で数百億円であろうが実際には二倍、三倍の予算を提示されても困難な工事であろう。

現在は海外からの要人を迎える迎賓館^{げいひんかん}として使用される。

D-3. 旧函館区公会堂

北海道函館市

明治 43 年（1910 年）竣工 設計：小西朝次郎。木造洋風建築。ペンキ塗り仕上げの色彩が素晴らしい。青を基調とし緑を黄色、アメリカ風のカリフォルニア版デザイン。ペンキ化粧の貴婦人と呼び、地元の市民集会所として市民の寄付で誕生する。旧函館区公会堂は、新政府が建てた役所（函館支庁舎）に比べて立派であると言われている。

D-4. 西本願寺伝道院

京都市下京区

明治 45 年（1912 年）元々は真宗門徒生命保険(株)の社屋として設計、施工され、その後、銀行、事務所、研究所、診療所と用途を変え、平成 23 年（2011 年）の改修前は西本願寺伝道院として使われておりました。

伊東忠太博士の設計と聞けば、当初より伝道院として設計したかのように信じるほどに古都京都の街に調和していると感じます。

理論家としても大活躍した伊東忠太博士は、建築家としても大活躍され、平安神宮・明治神宮を始めとする神宮建築、築地本願寺他の仏教関係の建築、一橋大学兼松講堂他の近代建築に至るまで、個性が光る装飾・デザインに大きな特徴が見られます。

西本願寺の伽藍近くに、門徒（信者）のための近代建築の建物を設計、施工した伊東博士の意図は、信仰の場を広くとらえ畳から椅子に変わっていくような日常の営みの変化を、先取りしていたのかもしれない。

建設当時の外観、間取り等にほとんど変化はなく、ロシア正教の教会を思わせる円形ドーム屋根を頂く八角堂には帯状の庇、石材の鉢巻、花頭窓を配しています。

解説書によれば、木造の伝統を進化し石材・鉄材で造るという伊東博士の「建築進化論」の実験・実証のひとつがこの建築であるらしい。

内部の状態も良好であり、玄関から一步入れば階段の登り口から見る天井、壁に見る木の特質を生かした作品は、装飾・デザインにこだわった伊東忠太の名作です。

ちなみに、元施工も改修施工も竹中工務店が施工者となった作品です。携わった石工、煉瓦工、鋳工の競作に大工、左官の技の傳承を見せています。

D-5. 東京駅丸の内駅舎

東京都千代田区

大正3年（1914年）竣工 設計：辰野金吾。この駅舎を見ていると堂々として、日本の玄関口に立ったような気持になる。日本銀行本店・国会議事堂とこの建物が代表格であり、見ておくべきであろう。原型はオランダ・アムステルダム駅と聞く。ルネサンス様式と少し異なる尖がり屋根や壁面の意匠がゴシック様式に近いと言われる。現在でも、大手町、北、南の玄関の吹き抜けと天井の絵柄。改札口のホール天井はローマのパンテオン神殿に倣^{なら}って作られている。左官仕上げに目を見張る。

D-6. 中之島公会堂

大阪市北区

大正 7 年（1918 年）竣工 設計：岡田信一郎 監修：辰野金吾。
相場で財をなした岩本氏の個人寄贈により建てられた。天井・壁は左官仕上げ。ステンドグラスが嵌め込まれ、天井ドームに天の図を西洋画壇の泰斗である、松岡壽氏が描いた。外装は赤レンガを基調に、屋根はルネサンス様式のドーム・銅板張。赤レンガに白い石の帯を通す。

D-7. 国会議事堂

東京都千代田区

昭和 11 年（1936 年）竣工。外装は 3 種類の花崗岩かこうがんの石積み、内装は 33 種類の大石じやもんがん・2 種類の蛇紋岩。日本全国から取り寄せた石の殿堂と言っても過言ではない。中央広間は 2 階から 6 階までの吹き抜けで、天井はステンドグラス。壁面には日本の春夏秋冬を描いた油絵があり、天井の飾りに左官職人の最高の技を見ることが出来る。

実際この仕事に携わった職人から聞いた話だが、優秀で技能卓越した職人の派遣を政府が要請したが、派遣した個々の企業名は一切公表されなかった。寸法が大きな鑊こては、塗り圧が不足し、不良の原因となるので、持ち込む全ての道具は、内務省の役人が検査し、その焼印のない鑊こての使用は許可されなかった。

D-8. 伊豆の長八美術館

静岡県松崎町

昭和 59 年（1984 年）竣工 設計：石山修武。全館が左官系仕上げ。壁面は漆喰仕上げ。天井の曲線の立体感。鑊絵により正面ドーム天井には天女の姿が浮き出ている設計者の石山氏によれば「あれ

は失敗」と言っておられたが、当時、日本左官業連合会の会長であった杉山氏たつての要望で、傘下の組合員手弁当による苦勞の作品である。伊豆の長八こと入江長八氏は、明治 10 年（1877 年）の第一回国内博覧会にこてえ鑊絵を出展し高評を得て、そのことが各地の腕に覚えのある職人がこてえ鑊絵に挑戦する切っ掛けをつくった。長八美術館の天女の姿態について、左官職に携わる者にとって（こてえ鑊絵の）“あの立体の盛り上がり”が長八への尊敬の念の現われです、と言う人、あるいは干渉を拒んだ左官職人の意地だと言う人もおられた。

あとがき

学者、研究者の方から証明されてないとお叱りを受けるかもしれませんが、建築に寄せる私の気持ちとしてご容赦いただき、私見を申し上げます。

単に棲み処なら鳥にしろ、動物にしろ、果ては魚類爬虫類までも巣作りをするかもしれません。約 250 万年前に出現した猿人も二足歩行する動物であったでしょう。約 50 万年前の原人は火を獲得し、洞窟に潜んだのでしょ。約 20 万年前の旧人では埋葬の習慣があったそうです。それが、約 4 万年前の新人に至っては洞窟に絵画を描いています。もはや、これは単なる巣ではありません。

縄文時代が始まる今から約 1 万年前に日本ですら竪穴式住居を建てていたのですから、文明発祥の地域では更に遡る頃に住居を建てていたでしょう。

初期の石器礫石器は猿人ですら使用していました。原人は剥片石器を使用し、新人では骨角器や細石器を使用し農耕牧畜を営んでいました。農耕牧畜を営んでいた新人が洞窟に住んでいたとは、考えられません。

旧人でさえ精神的な行為である埋葬を習慣化したのなら、新人に家族への思いやりがあつて当然でしょう。それならば、家族が寄り添って暮らす住居を建てたと考えたいのです。

そして洞窟に絵画を描いた人間なら、より住み心地の良い住居を建てたいと思ったでしょう。

稲作、コメ作りは小麦に比べ、はるかに生産性が高く且つ連作が可能でした。したがって、養える人口も多かったので大規模な集落を形成できたのです。そうなれば、食料貯蔵庫としての建物、集会や催事を司る大型建物が必要になりました。

余談ですが、ヨーロッパの王侯貴族が各地に城や館を所有してい

るのは、小麦の生産性の低さに依るとの説があります。非生産者である王侯貴族は、その地域の小麦を食い尽くすと次の地域に移動せざるをえないというのです。

青銅器と鉄器が同時に伝わった日本を除けば、ヨーロッパ、中東、インド、中国においては鉄器の出現も人々の営みに大きく影響しました。日本では祭事に用いられたと推定される鏡や銅鐸あるいは銅剣以外に道具として発掘される青銅器は鋤先やヤリガンナ、鏝などで非常に少量であります。

鉄器の初現は弥生時代早期とされ、弥生時代中期前半までには北九州地方に、後期以降は西日本全域に武器や農具としても拡散しました。日本国内での鉄の鑄造の始まりは諸説ありますが、鉄器の使用については前述の通りでしょう。

中国において鉄器が広く普及し始めたのは紀元前 400 年ごろの春秋時代であります。戦国時代最強の秦の軍隊では高度に精錬された青銅剣を使っており、鉄器は農具など生活の道具として広がったということです。普及した鉄器の道具の中に建築に関わる道具もあったはずで

そして、仏教伝来に由来する寺院建築のため百済から招いた技術者が、最先端の鉄器の道具を携えて来たのでしょう。

道具について考えるなら、幕末から明治維新においても西洋から輸入された機械式、動力式の製材機は板材の供給を飛躍的に増やしました。また、戦後日本に進駐したアメリカ合衆国の軍隊はブルドーザー、ベルトコンベヤー、圧送ポンプなど多くの道具を持ち込みました。その威力の凄さに、私自身感心したものです。が、どうでしょうか、今や日本製のこれら建築機械が世界中で高い評価を受けています。

反面、効率化の追求は画一化を招いたように危惧します。なるほ

ど、日本家屋にも標準化された寸法があり、仕上がりの差こそあれ職人の技量に関係なく収まるべきところに収まる畳や建具があります。

火事の多かった江戸の町で、庶民用の住宅が短期間で再建できたのも九尺二間といわれたような標準化、規格化された長屋があり、必要とする材木や建具を準備できていたからでしょう。

昭和30年代の高度成長期に供給された集合住宅も、同様に標準化、規格化されたことによって短期に且つ大量に建てることが出来ました。ただ、その土地土地の気候風土に根ざし、あるいは設計者が腕をふるった特徴のある建物が減り、箱型の豆腐のような建物ばかりが増え、日本中の街の風景が同じように見えるのが残念に思えます。

今回の講演に当たり資料を集める過程で、今更ながら先人達の偉大さや様々な建築の技に驚かされました。

日本の建築は、寺院建築を学んだ中国と文明開化に目覚め学んだ欧米からの遺産であります。そして建ちあがった建物は、ランドマークとして、それを見る人々の精神にも影響を与えました。

日本の寺院建築の第一号「飛鳥寺」は、国内の人々のみならず隋や朝鮮半島から飛鳥を訪れた人々にも日本が独立した文明国であると印象付けました。明治のはじめ西洋建築が建ち並んだ街並みを見て、人々は文明開化を実感しました。実際、私も1964年の東京オリンピックに向けて変貌する東京の姿、わけても聳え建った東京タワーを見上げ戦後は終わったと思ったものです。

私達建築業界は、伝統に培われた細かい配慮と進取の精神を忘れない気概を以て、日々職人の技に挑戦しております。

今、見直す事は技の評価であります。今日住宅は量産システムが重視される傾向にあり、このことが生活に味気をなくし住む人の個性

をも失っているように思います。私達にはもっと日常生活に潤いが必要なのではないでしょうか？日本の建築には、庭があり、飾り絵があり、静かな空間が人を育てているような気がします。

職人さんを大事にし、評価して頂く事を祈念して締めくくります。